慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中村菊男著『現代政治の實態』：その理論的背景と現實
Sub Title	K. Nakamura : An analysis of contemporary politics
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.11 (1959. 11) ,p.81- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19591115-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

おける究極目標としての直接的檢證（the test of immediacy）に本書も失敗している。國際連合の創設期に集中した著者の意欲的なアタックはまず成功したといえるだろうが、後半、特に第八、九、一〇回會期に關する檢證はまつたく乏しい。もつと多くの背景的資料が望まれるし、また入念に選衡された資料との充分な檢證にこそ、われわれの興味が繫がるものではないだろうか。これなくしては、いわゆるジャーナルなる範疇に類別されてもやむをえないだろう。

さらに、本書の紛れもない弱點は深さに缺けていることである。本書は國際關係學の立場から論ぜられ、その分野では相當の成功を收めている。だが、欲をいえば、國際法の立場からも多くの問題點を指摘し論及して欲しかつた。また、政治學の分野における最近の發展には目覺ましいものがあるが、いわゆる機能概念としての極化（ポラリゼーション）的現象といつた角度からも分析するならば、本書はさらに輪郭のすつきりしたものとなつたにちがいない。

いま一つ、本書は根本的な失敗を犯している。本書は國際連合の創設期およびその後一〇年間におけるラテン・アメリカ諸國の役割を分析するを目的としたことは再三繰返した。しかし、同時に世界的協力の成功または失敗の評價をも目的として、著者は「完全性よりもむしろ選擇性」にアプローチの手段を選んだはすである（序文、七頁）。にもかかわらず、その効果は完全といつてよいほど本書の視野外にあるようである。筆者は、著者のなみなみならぬ努力に滿腔の敬意を表するものであるが、同時に、本書が全體的部分的に不問のままに殘した多くの問題點に對して、さらに徹底した學究的追究が導かれるよう願つてやまない。

（賀川俊彦）

中村菊男著
『現代政治の實態』
――その理論的背景と現實――

政治學は科學であるか？　通常、政治學者は、屈辱的に、否と答えるであろう。だがそれは、きわめて曖昧な問い方であるように思われる。というのは、そこには、《政治學》とか《科學》というものによつて、なにを意味するかがあきらかでないからである。いま、屈辱的にといつたのは、《科學》という言葉に對してであることはいうまでもない。それが、自然科學におけるように、普遍妥當的法則に關連する嚴密な理論體系というものを意味するとすれば、現在のところ、政治學における法則的一般化は、そのような意味で、科

學というステータスを得ることはできない。しかしながら、このことは、社會科學一般についていえることであつて、政治學が科學でないとする理由にはならないであろう。

それに對して、《科學》という言葉を、方法論的な意味において、科學的であるというように解すると、右の問いが、ことさら政治學に向けられた理由が、よほど明確になろう。この點を、現代政治學——といつても、はつきりした輪郭があるわけではないが——の研究方法についてみると、どうであろうか。それは、少なくとも十九世紀末までの政治學——かりに、古典政治學と呼ぶ——に對しては、否定的立場にある。つまり、古典政治學は、一般的に、それも原理的にいつてのことであるが、國家という形而上學的實體概念を中心とし、その目的、正義、あるいは最善の統治形態等を論究してきた。こういつた意味では、政治學は科學ではなく、哲學であつた、といつてよい。

今世紀における政治學は、みずからの科學的性格に意識しはじめ、思辨的方法をやめて、政治的現實への經驗的スコープをいちじるしく擴大してきた。その基本的特徴は、經驗主義的であり實證主義的であるといえる。政治學者は事實的データを觀察し、分析し、《作業假設》を證據によつてテストするという科學的方法を採用し、その理論構成にも、しだいに嚴密さをましつつある。また、政治の實踐方法においても、彼は、人間社會に受けいれらるべき價値目標を前提とし、科學的方法によつて得た科學的認識の基礎のうえにたつて、それらを一歩一歩伸張させてゆくという態度をとつている。それ故、彼の態度は、研究過程において事實と價値の混同をさけているものの、倫理や道德理念を無視してしまつているのではない。このように、現代政治學の方法論は、理論的にも實踐的にも、科學性をそこなうことなく、科學としての政治學の確立に向つている。したがつて、先の問いは、現代政治學に關する限り、あまり意味がないと思われる。

同じようなことを、マルクス主義について問うてみたらどうであろう。マルクス主義理論は、政治學プロパーというよりもむしろ、歷史理論といつた方がより正確であろう。とすると、歷史は科學であるか？ という厄介な問題に出會わされ、まずこの問題を解明しなければならないことになろう。けれども、すでにみたように、科學的方法としての歷史研究という側面についてみると、各々の歷史學者は、すぐれた史料の觀察者であり、分析者であることはまず疑いない。認識主體としての主觀性という問題が、とりわけ歷史學の狀態を不滿なものにしているとはいえ（そのことは政治學についても同樣である）、歷史の知識は科學的知識であるとしてよい。

しかしながら、マルクス主義は、この點で、いわゆる歷史學の科

學性をはるかに超えているのである。それは、大膽にも、自然科學と同等なステータスを要求さえしている。ということは、マルクス主義は歴史法則を科學的に認識し、歴史の傾向に對して科學的豫測を與えている、という意味である。かくてそれは、みずから科學であると肯定する。歴史學者としては、そのような理論を、巨視的一般化として受けとることはできても、自然法則の名に價するものとは考えていない。それは、歴史哲學としてのみ可能なものであるから。ところで、マルクス主義者――マルクスではない――は、それをどう受けとつているか。それは、もはや新しい事實によつて檢證され、反證さるべき《作業假設》としてではなく、絶對的眞理とみなされている。彼は、科學的認識の認識態度そのものを否定し、科學的方法を放棄してしまつている。

さらに、マルクス主義者を、行動主體としてみるとどうであろうか。政治的實踐の科學的方法とは、科學的認識、あるいは理論に依據した假設的プランをたて、經驗の範圍内において、漸進的に實踐してゆく方法のことである。それは、試行錯誤によつて、得られた結果にもとづきプランを修正し、理論をテストする機會を與える。それに反して、マルクス主義者は、一たび定立化された歴史法則を神聖視し、すべてを犠牲にするラディカルな全體的變革を試みようとする。理論のテストとか行動のリスクなど問題にならない。彼は理論的認識をドグマ化し、實踐において狂信的態度をとつている。

あらためて問うてみよう、マルクス主義は科學であるか、と。科學であるというのなら、科學的方法によつて得られた科學的認識をさらに事實によつて檢證し修正しつつ、より高次の科學性へと高めてゆかねばならない。マルクス主義者には、そのような努力が缺けている。さらに實踐の場においては、彼はいかに倫理的情熱によつて動機づけられていようと、倫理や人間性を踏みにじる反科學的方法、非合理的態度を採用せざるを得ない。それ故、マルクス主義的思想や行動が、政治學の科學性とその發展を害しているとすれば、政治學は科學であるか、という最初の問に對して、反省すべきものは、ほかならぬマルクス主義者だといえよう。

このように、ながながしく述べてきたのは、中村菊男教授の新著『現代政治の實態』における問題意識に、接近してゆくためにほかならない。本書は三篇より構成されているが（第一篇「現代政治の社會的・思想的背景」、第二篇「各國政治の諸形態」、第三篇「政黨政治の實態」）、著者の序にしたがえば、第一篇のテーマは、「年來研究している民主社會主義（democratic socialism）の考え方がどのようないきさつで生まれたかを自己の政治學の體系のなかでとらえてみる」ことにあり、かつ、第三篇における事實的・實證的研究は、著者自身が「もつとも力を注いだもの」である。この二つの部

分は、先に述べた科學的方法というものからみて、著者の一貫した方法論をユニークなかたちで展開したものとみなしてよい。すなわち、著者は、政治學の科學性という問題を、具體的・經驗的研究によつて深めつつ、他方において、政治の實踐科學としての民主社會主義の理論ととりくみ、マルクス主義の反科學性と對決しているわけである。

本書の內容を詳しく紹介することはさし控える。以下には、右の點について、中村教授の基本的な思考方法を、本書と關連させてとらえてみることにする。本書は新書ではあるけれども、そもそもは、同教授の『政治學』に基礎をおいたものである。『政治學』は初版以來六回も改訂され、その都度、著者によつて新しい研究がつけ加えられて來た。本書の成るにあたつて、『政治學』は絕版にされるとのことであるが、この十年餘りの年月は、著者の政治學研究の發展過程をみごとに示している。著者はたえず、政治的現實への經驗的スコープを擴げてきたのであるが、とくに本書において、現實に對する鋭い問題關心がはつきりと示されている。著者自身の政治學研究の歷史の歩みは、古典『政治學』より、いわば『現代政治』學への移りゆきを、よくあらわしているといえよう。本書において、注目すべきことのひとつは、「國家の本質」（『政治學』第二篇）を政治學の中心課題とはせず、政黨政治をガヴァメントの關連枠とし、制度的アプローチばかりでなく、現代政治學のいわゆる行動的アプローチによつて、それを分析している點である。このことが、第三篇の內容をきわめてフレッシュなものにしているのである。

第一篇における現代政治の社會的・思想的背景の問題は、著者のこれまでにおこなつた研究成果（『民主社會主義の理論』、『民主社會主義の思想』、『民主社會主義の基礎理論』）を基礎とし、その擴充をはかつたものである。民主社會主義の主張は、その價値理念において、マルクス主義と異なるところがないにもかかわらず、その理論と實踐において、それと相容れない立場にある。すなわち、「……社會革命の到來、すなわち、歷史をマルクス主義でいう『前進的』方向にもつていこうとする行爲、つまり歷史的必然の線にそう行爲がすべて正當化されるようになる。それに役立つものが進步であり、それに役立たないもの、歷史的必然の現象に逆らうような行爲は反動とされる。それがいかほど個人の良心の反映であり、自己の理性の判斷の結果であつたとしても、この歷史的必然を認識しない考え方なり行動なりはしりぞけられてしまうのである」（一一三頁）。

それに對して、民主社會主義は、「民主主義を尊重するから政治はあくまで議會を通じて行うべきであるという原則」（一四一頁）にたち、マルクス主義のような歷史的認識にではなくて、政治的認識

に徹底する。すでにみたように、實踐的行動においても、科學的方法というものが保持されなければならないとしたら、そのことは、民主主義の制度的保證によってのみ可能である。少なくとも現在のわれわれの知識からすれば、民主主義の方法が、もっとも科學的であり道德的であるとされなければならない。著者が、マルクス主義を批判しつつ、「社會主義と民主主義とを一體のものとして結びつける思想」（一四二頁）として、民主社會主義を主張するところは、きわめて說得力がある。それは、たんなる價値のプリファレンスではなく、漸進的にプランを實踐してゆくという科學的方法によつて貫かれているからである。

以上、本書をはなはだ勝手な視角からとりあげてしまい、しかも不充分な紹介におわつてしまつた。もしわたくしが、中村教授の基本的な考え方を、誤つて理解していたとしたら、それはお詫びしなければならないと思う。なお、第二篇については、ここに觸れなかつたが、米國留學中の教授からいただいた手紙によると、アメリカにおける政治について、豐富な研究を重ねられたとのこと、歸國後は、この比較政治のフィールドにも飛躍的發展がなされるであろう。教授の今後の研究に一層の期待をよせつつ、稿を閉じることにしたい。（昭和三三年　有信堂刊　六〇〇圓）

（奈良和重）